

インタラクティブ空間演習 オリエンテーション

女子美術大学大学院美術研究科博士前期課程デザイン専攻メディア研究領域

1. 「意義ある余暇」としての大学院

- a). school の語源 “skhole” (スコレー、ギリシャ語) = 「意義ある余暇」
- b). 「閑暇とはたんに暇な時間ではない、また、仕事の疲れを癒す休息でもない。
閑暇は、人間が学問や芸術に専念し、幸福を実現するための、自由で満ち足りた時間である」
(加藤守通「第2講 哲学と教育」、『教育思想史』今井康雄(編)東京：有斐閣アルマ、2009年、46頁。)
- c). 大学院でこそ学べることを学んでほしい。修了後の環境では(生活上・實際上)学びにくいことがある。

2. 担当講師紹介

- d). 石井 拓洋 (ISHII, Takuyo), Ph.D. takuyo.ishii@gmail.com
- e). 研究領域
 - 音楽文化学研究 (とくに、20世紀アメリカの音楽と文化)
 - 作曲家アーロン・コープランド研究 (Aaron Copland, 1900 - 1990)
 - 芸術理論全般 (理論研究の経験に加え、音楽に限らない多様な芸術ジャンルの実践経験をふまえて)
- f). 論文
 - 「アーロン・コープランド：『アメリカらしさ』の革新性と映画音楽への展開」(東京芸大博士論文, 2016), 他

3. 授業説明 (シラバス参照のこと)

- g). この授業は、大学院修士課程で一般的に必要とされる〈研究的視点〉理解を深めつつ、〈研究作法〉を体得する授業。
- h). 特に〈研究的視点〉の理解を深めることに力点をおく。
- i). 人文社会科学の研究での主要な論点を知る (西欧近代主義、知の権力、周縁、言語に対する新しい認識、など)。
- j). 〈実体論〉から〈関係論〉へ の思想潮流の理解 (肯定的、批判的いずれの立場でも無視できない研究動向)。
- k). 〈他者〉を知る。「理解不能な事柄」にこそ自らの視点の欠落がある。〈他者性〉を受容するための資料精読のすすめ。
- l). 大学院修士課程において必須な研究上の作口法を習得する。

4. 遠隔授業のためのツールについて

- m). 講義資料 Web ページ <http://www.iiitak.com/ma2020/> (「資料用クラウド」へのリンクもあります)
- n). 「資料用クラウド」 “TeraCloud” (テラクラウド) ログイン ID とパスワードは 講義内で知らせます。
- o). 授業に際して、スムーズにプリントアウト (PDF 資料の紙への印刷) ができる環境を用意しておくこと。
- p). 講読テキスト (渡辺裕論文など) は必ず紙に印刷すること (遠画面内でテキストと資料の同時表示が困難なため)。
- q). 教員や発表担当の院生は、資料を PDF ファイルにして授業開始までに、「資料用クラウド」にアップすることとする。
TeraCloud > ログイン > ファイルブラウザ > 「01_前期_授業資料・発表資料」 > 各回のフォルダへ
参加者は、授業開始までに「資料用クラウド」にアクセスして、各自の環境で資料 PDF の印刷をすませてください。

5. 来週の連絡

- r). 第二回 (5/20) は「研究計画書」に基づいて 各自の研究紹介をして下さい (紹介+質問など一人約 10 分程度)。
- s). 5/19 (火) までに「研究計画書」の PDF を、「資料用クラウド」の以下のフォルダ内へアップしてください。
TeraCloud > ログイン > ファイルブラウザ > 「01_前期_授業資料・発表資料」 > 「第 02 回_2020-05-20」へ

Active Academy

SYLLABUS検索システム

シラバス検索 授業内容

STEP-1 シラバス検索TOP

STEP-2 検索結果一覧

STEP-3 授業内容

Graduate school
大学院

選択した授業科目の内容です

令和 2 年度

操作ボタン

授業科目名 : インタラクティブ空間演習

授業コード : 5K091

英文科目名 : Interactive Space

開講期間	配当年	単位数	授業形態
通年	1・2年次	2単位	演習
担当教員			
石井拓洋			
杉並校地		デザイン専攻研究関連科目	

科目キーワード	スタディー・スキル、研究方法、藝術研究、文化研究、西洋近代主義、近代批判、記号論、批評理論、実体論、関係論、美学、音楽
授業内容 1	大学院での藝術文化研究を開始するにあたり、そこで必要となる基礎的研究スキルを習得する。また、文献講読をつうじて、今日まで美や藝術、そして文化領域の研究で議論されてきた主要な論点のいくつかを理解する。本演習を通して、各自における研究的視点の更なる深化を目指す。
授業内容 2	
授業計画	前期： 第1週 オリエンテーション ・授業説明。 第2～第13週 文献講読 ・各回では、藝術・文化研究において意義をもつテキストを取り上げて講読する。 ・講読テキストは基本的にプリントとして配布する。 ・受講生は、それぞれの担当回を事前に決定の上、文献資料の担当個所の要約を発表する。 ・受講生の状況によっては、英文資料を扱う場合もある。 第14～第15週 課題論考執筆への支援 ・前期課題論考（過去出題例：「先行研究の批判的検討のレポート」など）の執筆に関する支援 ・前期まとめ。 後期： 第1～第3週 前期提出課題の論考の検討 ・個別対応で内容を検討する。 第4～第10週 前期課題論考に基づく、受講生による研究発表、 ・各回につき一人が発表し、その後、参加者全員で内容を検討する（ただし、受講生の状況をみて、文献要約発表への変更の可能性あり）。 第11～14週 文献講読 ・（前期と同じ） 第15週 後期まとめ ・まとめ。後期課題論考（過去出題例：「文献要約レポート」など）の執筆に関する支援 ・演習内容を踏まえ、教員や参加者が、藝術・文化研究の今後展望、その試論を提示する。
到達目標	・大学院研究に要する、一般的・基礎的研究スキルの習得。 ・「テキスト精読」の重要性を認識し、基本文献の講読を通じて、先達が取り組んできた藝術・文化研究上での重要論点を理解する。
授業以外の学習方法 （予習・授業準備・復習等） ※共通理論科目はなるべくご記載ください	・講義資料・講読資料を公開する本授業の教材Webページを利用して予習復習を行うこと。 ・あわせて附属図書館のリソースを有効に活用し、授業内で触れたトピックや、作品・人物などの知識の復習に努めること。 ・自身の発表時は授業開始までに必要な配布資料の印刷を完了して授業準備を行なっておくこと。 ・蓄積していく配布資料をクリアファイルにまとめるなどの工夫を各自で行うこと。
履修者への注意事項	・受講にあたり、真摯に研究を志す立場ならば他領域からの受講生も歓迎する。 ・大学院授業のルールとして、発表担当者が発表当日に欠席することは認められない。 ・いわゆる「インタラクティブ」の語から連想しうる情報技術は要せず、また、各回でもその周辺に積極的に触れるものではない。 ・常に自らの思い込みを疑い、「テキスト」に読める「他者性」に着目し、粘り強い思考を通して自身にない知見の受容を試みたい。 ・本授業では、議論や発表時の体裁の良さは求めている。各自の複雑な思考を、複雑なまま正しく言葉にされることを望む。
評価方法	・授業貢献度（問題提起、論点抽出、参加者全体にとって利のある円滑な授業進行、などへの寄与）（25%） ・担当回における発表の内容（25%） ・論考 [レポート課題]（50%）
テキスト	
参考文献・参考作品	さしあたり、美や藝術、文化研究上の諸概念を理解するための用語辞典を用意することがのぞましい。以下は一例である。 ・川口喬一・岡本靖正(編)『最新文学批評用語辞典』研究社。 ・ジョセフ・チルターズら(編)、杉野健太郎ら(訳)『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』松柏社。 ・大澤真幸ら(編)『現代社会学事典』弘文堂。

https://aa.joshibi.net/aa_web/syllabus/se0020.aspx?me=EG&opi=se0010

1/2

